

2026年3月8日 説教「失くなった銀貨」

ルカの福音書 15章 8～10節

15章は、イエス・キリストが取税人、罪人を受け入れ、共に食事をしていることに、パリサイ人と律法学者が批判的につぶやくことから始まりました。イエスは、それに対してたとえ話をもって教えられます。今回は「迷子の羊」のたとえ話でしたが、今朝はそれに続くものです。わずか3節ですが、「迷子の羊」の話と対のようになっています。双方を比較しながら読んでいきましょう。

1. 失われた銀貨 (8節)

①銀貨十枚 (8) 「また、女の人が銀貨を十枚持っていて、」

このたとえ話は、ある女性が銀貨を十枚もっていた、という設定です。銀貨というのはドラクマというギリシャ通貨です。ローマ通貨でいえば、一デナリ。貧しい労働者の一日の賃金ぐらいです。大きな価値があるというほどではありません。それを十枚持っていたというのですが、首飾りにしていた可能性があります。10枚の銀貨は、迷子の羊のたとえで言うならば、100匹の羊です。銀貨を持っていたのは、「女の人」ですが、100匹の羊の方は牧羊主であり羊飼いである人です。数の面でいえば、10と100という違いがありますが、ちょうど10倍ということで、共通性があります。

②一枚を失くし (8) 「もしその一枚をなくしたら」

さて、女の方は10枚の銀貨のうち一枚を失くしてしまったのです。物を失くすというのは、私たちの日常生活においても、起きやすい出来事です。特にこの女にとって、その一枚でもそれを失くすということは、ショックなことであったと思います。迷子の羊の話では、一匹の羊がいなくなってしまうということですが、羊飼いにとっても大切な一匹でありました。100匹の内の一匹ですが、家族同然と考えるならば、貴重な一匹でありました。こちらも大きなショックです。

③念入りに捜す (8) 「あかりをつけ、家を掃いて、みつけるまで念入りに捜さないでしょうか。」

銀を失くした女性はそれを見つけるために、家の明かりをつけて捜しました。当時の家は窓も少なく暗かったのです。ほうきで掃くことによって、目では見落としてしまっている所から、掃き出されて、見つけられると思ったのでしょう。そのようにして、銀貨が見つかるまでは血眼になって捜したのです。羊飼いが99匹を野原に残してまでも、山や谷を越えて、迷子になった羊を必死で捜したのと共通しています。

2. いっしょに喜ぶ (9節)

①見つけたら (9) 「見つけたら、」

そしてついに、女は家の中で、その銀貨を見つけたのです。どのようにして見つけたかは記されていませんが、意外な場所にあったのだと思います。一方、羊の方もあちらこちら歩き回り、不安そうにしている羊を見つけ出したのだと思われます。

②呼び集め (9) 「友だちや近所の女たちを呼び集めて」

女は友達や近所の女性たちを呼び集めるのです。いつもこんなことをするわけではありません。でも彼女にとって貴重な銀貨が見つかったのですから、ためらわないで皆に声をかけたのです。羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。この心持ちは両者に共通していました。

③一緒に喜んでください (9)『**『なくした銀貨をみつけましたから、いっしょに喜んでください』**と言うでしょう。』

女は集まってくれた友人や近所の人たちに言うのです。「銀貨が見つかりました!一緒に喜んでください」。これもまた、羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。「いなくなった羊が見つかりました!一緒に喜んでください」。もう見つからないと思っていた銀貨や羊が見つかることはそれほどうれしいのです。

3. たとえの結論 (10 節)

①同じように (10)『**あなたがたに言いますが、それと同じように、**

たとえ話をし、そのまとめを言われる時のお言葉です。「それと同じように」とありますが、新共同訳の「このように」よりわかりやすいと思われます。ちなみに、羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。「それと同じように」となっていますね。

②罪人の悔い改め (10)『**ひとりの罪人が悔い改めるなら、**

失くなった銀貨の話の結論です。「ひとりの罪人が」とありますが、「ひとり」の価値が強調されています。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ書 43:4)という思想と重なります。「悔い改めるなら」とありますが、全面的な方向転換を意味します。もちろん、それは何らかの具体的な罪を告白して神の前に出ることなのですが、生きる向きが変わっていくことが重要なのです。ここまでは、羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。結論も同じです。

③御使いたちに喜びが (10)『**神の御使いたちに喜びがわきおこるのです。**

一人の罪人が悔い改めるといふ出来事は、どんなことが起きるのでしょう。なんと「神の御使いたちに喜びがわきおこる」とあります。ここは羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。結論は、「悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」とあります。「喜びが天にある。」という部分はこちらの「神の御使いたちに喜びが」と重なります。要するに、こちらは端的に、神の(天の)御使いたちに喜びがあるというまとめですが、羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。結論は九十九人の正しい人と比較と罪人の悔い改めがポイントの一つでもありました。いずれにせよ、地上において罪人が悔い改めるといふことが、天に大きな喜びをもたらすといふお言葉に励まされます。

《展開と結論》

これまで、前回の「迷子になった羊」のたとえ話に続く 8 節から 10 節の「失くなった銀貨」の話と、「迷子の羊」の話を比較して見てきました。わかったことは、二つの話はそのテーマはよく似ています。動物である羊と、物である銀貨という違いがありますが、双方共、失われてしまったという点では同じです。羊には命があり、銀貨には命はありません。それに、銀貨というのはそれほど高価ではありませんでした。ですから経済的損失が主たるショックではありません。しかし、懸命になって捜しているところを見ると、この女性にとっては、非常に大切であった物なのです。首飾りに用いていたならば、一つが欠けると首飾りとしては不格好になってしまっていたかもしれません。ともかく、一つの小さな銀貨であっても所有者にとってはとても大切であったのです。その面では、一匹の羊も同じでした。「わずか一匹」ではなく、「かけがない一匹」であったのです。だからこそ、羊飼いや、近所の人々を集まったもらったのです。ここに私たちは、「一人」にご関心を持ち、大切にしてください。主なる神のお心というものを学べるのです。「どうせ自分なんかは誰も振り向いてくれない」と思う人にも優しく寄り添って下さるのです。

二番目に学びたいことは、この双方とも、所有者の側が捜しているという点です。当たり前と言えば当たり前です。迷子の羊は自分では元の場所に戻ることにはできないのです。そして、失くなった銀貨の方では、自分では全く動くこともできないのですから、この女性に捜してもらうしかありません。そして、見つかった時には、双方とも所有者が周りの者たちと喜びを共有しているのです。これは、天における喜びとも教えられています。それは、ただ一方的な恵みであることがわかります。「あなたがたが救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである」(エペソ 2:8 口語訳)とありますが、主なる神の側から救いの御手は伸べられるのです。それも、失くなった銀貨のように、見向きもされなくても仕方がない存在に、熱い思いをもって捜索がされるのです。

この二つのたとえ話で興味深いところは、一方的な恵みによって捜すという点が語られているにもかかわらず、結論に至って、「一人の罪人が悔い改めるなら」と、一転、私たち人間の側の対応が要件として記されていることです。つまり、見つけ出されるという恵みがテーマである二つの話は、人間の悔い改めという、神への立ち返りという出来事に移っていくのです。逆に言えば、人間の側からみると、改心だけが見えていますがそれは恵みに基づいていたのです。ここでは、罪人と食事をするイエスということが背景になっていますが、彼らは恵みを素直にいただく人たちであり、自分たちの罪の自覚していました。それゆえに悔い改めの促しの意味がよくわかりました。私たちも、自分が失くなった銀貨のような者たちだと認識したいのです。そして、捜していただくことの恵みに気が付いて、主なる神の前に悔い改め、主との関係に生きるという決意を新たにしていきたいのです。